

# 人材育て魅力向上を

「来年は座学だけでもいいので、タイでも受け入れをお願いしたい」。世界中の人と物が行き交うシンガポールのチャンギ国際空港。その近くに拠点を構える西日本鉄道国際物流事業本部で、国際経営学科の岩重聡美学科長は切り出した。海外ビジネス研修の試行時代からシンガポールで受け入れてきた同本部。「熱いですね」と松原章夫執行役員は相好を崩した。

文部科学省によると全国で7割以上の大学がインターンシップに取り組み、一方、必修科目にしている学校はまだ少ない。思い切った決断だった」と県立大の太田博道学長は振り返る。学生には参加費、教員には研修先の確保という負担を強いるからだ。

「研究者がなぜこんなに頭を下げるのか、葛藤もある」。岩重学科長はこう漏らす。それでもより良い研修を追求するため現場に足を運ぶ。

県立大の「本気」の背景に、県内の大学が直面する学生確保の厳しさがある。

2017年の全国の大学進学率が50%を超える中、本県は38・3%と低調。しかも、このうち県内への進学率は33・9%にとどまった。

## 大学の狙い



□2□



企業に出向き今後の受け入れなどについて話し合う岩重学科長  
—シンガポール、西日本鉄道国際物流事業本部

「知名度やブランド力では都市圏の有名大に対抗できない」。そこで選んだのが社会に売り込めるポイントを作ることだった。産業界が学生に主体性や実行力を求める中、海外研修では背景が異なる人と協力して業務や課題に取り組む経験が積める。学生の受け入れ先は製造、観光、流通と多岐にわたり、業界大手や公的機関が中心。試行を始め、

受け入れ企業に就職する学生も出てきた。  
「全国区の企業に数人でも入れば(大学の価値が)分かりやすい」と太田学長。「都会の大学に行かなくても十分だと感じ、後輩に伝えてくれれば究極のPRになる」

公立大ならではの事情もある。経済的な理由で地元大学しか選べなかったり、入試の結果に基づき志望先を変更せざるを得なかったりした、いわゆる「不本意入学」の学生が県立大にもいる。「(海外での研修をやり遂げられれば)大きな自信になり、一つ上の世界を目指そうと思えるはず」と岩重学科長。「この大学に来てよかったと感じてもらい、上を向いて人生を歩んでほしい」。そう力を込めた。

メモ

**国際経営学科** 2016年度の学部学科再編で新設された経営学部の学科。グローバル人材の育成を目指し、経営学の知識とともに、実践的な英語力の習得力を入れる。大学1年でフイリピン・セブ島での約3週間の語学研修、大学3年で海外ビジネス研修を必修科目として設け、参加条件としてそれぞれTOEIC600点、同730点を課している。